

シリーズ 言語文化教育研究
言語教育とアイデンティティ形成
—ことばの学びの連携と再編—

2010年10月15日(金)
17:00～19:00
早稲田大学22号館8階会議室

書き手としてのアイデンティティを形成する
—大学アカデミック・ライティング・プログラムでの
協働的活動を通して—

早稲田大学ライティング・センター
ディレクター 佐渡島紗織

話題提供 次第

1. 書き手としてのアイデンティティ
2. <ライティング・センター>における協働的活動
3. <オンデマンド授業>における協働的活動
4. チューターや指導員の成長

(日本語母語話者、非日本語母語話者、英語母語話者、非英語母語話者など)

1. 書き手としての アイデンティティ

1. 書き手としてのアイデンティティ

アイデンティティ

「人格における存在証明」

『広辞苑第5版』

「行為者一人一人の自らの居場所」

「『自分とは何か』『自分とはだれか』という問題を考え続ける過程で形成される行為者の自分自身に対する答え」

「私が私であることを保障される場所」

細川英雄 (2009) 「動的で相互構築的な言語教育実践とは何か」 『社会言語科学』12,1 32-41

1. 書き手としてのアイデンティティ



1. 書き手としてのアイデンティティ

話題提供の目的

大学(学術的文章を作成する)

学習者と支援者が協働的に活動する場

<ライティング・センター>

<オンデマンド授業>



書き手としてのアイデンティティが
生まれたり、変化したりする
様子をとらえる

2. <ライティング・センター> における協働的活動

2. <ライティング・センター>における 協働的活動

<早稲田大学ライティング・センター>

2004年—2007年 国際教養学部(現代GP)対象
2008年—現在 全学対象
(2010秋 理工キャンパス分室)

日本語文章と英語文章
教員2名、助手5名、チューター約20名、受付職員3名
年間 約2000セッション
1セッションは45分間

チューター研修 毎週90分間
書類審査、面接審査、独り立ち審査、教育補助審査
オープン教育センター「学術的文章の作成とその指導」必修

2. <ライティング・センター>における協働的活動



個別指導の様子

2. <ライティング・センター>における協働的活動



五つの個別指導ブース

2. <ライティング・センター>における協働的活動



来訪者の個別ファイル

(受付シート、文章やメモのコピー、チューターによる
申し送りシート)

2. <ライティング・センター>における協働的活動

<ライティング・センター>における指導理念

『自立した書き手』を育てる



「文章を直す」のではなく「書き手を育てる」

- (1) 添削をしない。代わりに書かない。
- (2) 書き手が独りになったときに文章の修正ができるように指導をする。
- (3) 書き手に会話の主導権を握らせる。
- (4) ヒントや修正の選択肢を示し書き手が最終判断をする。
- (5) 書き手が気付くように、質問をする。
- (6) 表現しやすい言語で、書きたい内容を話させる。

2. <ライティング・センター>における協働的活動

(1) 添削をしない。代わりに書かない。

「今日はどんなことをしたくてライティング・センターにいらしたのですか。」

「これ、あした提出なんですけど、読んでいただいて、へんだと思ったところがあったら直してほしいんです。」



×「分かりました。では読んでみますね。」

○「そうですか、特に自信がないところはありますか。」

「なんか、全体の構成がこれでいいのかどうか、ちょっと分からないんです。」

「では今日は、全体の構成についていっしょに考えましょうか。どんな構成にしようと思ったんですか。」

2. <ライティング・センター>における協働的活動

(2) 書き手が独りになったときに文章の修正ができるように指導をする。

時系列で史実を挙げ、最後に結論を書いている文章を検討している。史実を自分の結論を支える根拠として、すべて後に書けばよいと気づいた瞬間。

260「じゃあ、これは最後のまとめのところで言えがいいのか。これも、これも最後のこっちに持ってきて！」

(3) 書き手に会話の主導権を握らせる

- 111 チューター: ああ。Communicating with people world widelyってことなのかな。
- 112 書き手: これ、使いたいんですけど、どこに入れればうまく文章がつながりますか。
- 113 チューター: world widely。
- 114 書き手: communicating world widelyですか。
- 115 チューター: うーん、ここはworld wide communicationだと
- 116 書き手: じゃあ、ここをis important for world wide communication.....。
- 117 チューター: world wide communicationだと、でも、何かちょっと商業的な感じがするんですよ。確かに実用的なんだけど、ビジネスに、実用的みたいに感じる。
- 118 書き手: ああ。もっとお友達とかでもフレンドリーな感じが多分.....。
- 119 チューター: そうですね。
- 120 書き手: various peopleが・・・。
- 121 チューター: various peopleがちょっと変なのかもしれません。
- 122 書き手: そうなんですか。この間教えてもらって、こういうニュアスかなみたいな感じだったんで。
- 123 チューター: 確かに多分、そういうニュアスなんですけど、お話を聞いてると、この世界のさまざまな人っていう。
- 124 書き手: とか、(不明)が(不明)じゃなくてみたいな感じに、特定の地域になっちゃうかもしれないから、どうすればこう.....。

2. <ライティング・センター>における協働的活動

(4) ヒントや修正の選択肢を示し、書き手が最終判断をする。

書き手の意図に合う同義語を探す過程で、チューターが辞書を見ることを提案する。

書き手84 「もうここで使われているから違うことばにします。」

チューター85 「文全体が同じでなければいいと思うよ。でも変えたいなら辞書を見てみようか。」

書き手87 「identifyの換わりになる言葉を探そうとしているんだけど・・・。ああ、この辞書にはないや。indefinite, indemnity, indent, independence. indicate, designate. showの類義語はどうだろう。to show、これは古すぎますよね？ あ！ exhibit！」

(5) 書き手が気付くように、質問をする。
自分の主張の柱が二本だと思っていたが、三本だと明確になった瞬間。

チ193「米西戦争があって、それがスペインの内戦を引き起こしたってことですか？」

書194「いや、違います。」

チ195「これはちょっとわかりにくい。」

書196「つまり、米西戦争っていうのは、一応虚構のものであったにしろ、スペイン人っていうのが築いてきた植民地だとかを全部...」

チ197「とっちゃった。」

書198「戦争で失って、本当にもぬけの殻になっちゃったっていうか、何ていうか。」

チ199「うん、そういう事実があるんですよ。」

書200「そう。」

チ201「それで著しいその国の低下があったんですよ。スペインっていう国が弱くなっちゃったわけですよ。で、突然ここで内戦の話が出てきますけど、この内戦は？」

書202「ああ、わたし、もう一個説明します。何か米西戦争もそのスペインってものが虚構であるっていうものを表している一つの現象で。だから、このスペイン的なものは虚構であったという認識、それから本来のスペインはどこにあるだろうかという疑問、それから米西戦争っていう三つが、その虚構かな。」

2. <ライティング・センター>における協働的活動

書き手の気づきを促す対話の特徴（佐渡島、2009より）

- (1) チューターが【感情の共有】を重ねている、
- (2) 【書き手の意図】を十分に話題にしている、
- (3) 書き手自身が【問題提起】をしている、
- (4) 【書き手の意図】を話題にするなかで、チューターが【読み手の解釈】を伝えている、である。

書き手の気づきを促す支援の方法（チューターの経験より）

- (5) 書き込み作業を促す。
- (6) 一緒に辞書や事典を調べる。
- (7) 一緒にメモ、図を作る。
- (8) 書き手の発言を書き取って、後で渡す。

2. <ライティング・センター>における協働的活動



様々な国籍・母語のチューター

(6) 表現しやすい言語で、書きたい内容を話させる。

日本語母語話者である書き手が、文献から読み取った事柄をバイリンガルのチューターに伝えている場面。書き手は、『門』や『舞姫』を英語で読み、セッションでは日本語を使って分析の観点を探ろうとしている。一つの発話で645字も一度に話している。

96 書き手「『門』については、前田愛がhere and nowで、here、ここと今がどのように、場所と現在、時がどのようにして侵されているかっていうのを書いてて、こっっていうのはさっきも言ったんですけど、御米の部屋に漱石の弟が居候に来るんですけど、漱石の弟は2人の結婚に賛成してなくて、なぜかという、漱石が京大を辞めたことで弟が父親のビジネスの後継者にならなければいけなかったから、よくちょっと読み取れてないんですけど、被害を被った1人なんで、2人の結婚に賛成してなくて、御米もそれを知ってるので、自分の部屋にこの子が入ってくることで、御米の生活spaceが侵入されていて。御米は何度も流産、3度流産していて、小説の中では安井を捨てて漱石と結婚したことへの罪だっていうふうにいわれていて。現在、今はどのように侵されるかっていうと、元だんなの安井が坂井一家のところに戻ってくるんですけど、坂井一家っていうのは、漱石たちの家のオーナーだったと思うんですけど。で、漱石の弟も坂井一家で、何だっけ、働く？ 関係してくるので、安井が戻ってくるのはすごく漱石にとっても御米にとってもまずくって、安井が戻ってくるってことが現在を侵される原因なんですけど、っていうふうに前田愛は書いてて。思ったのは、『舞姫』ではhere and nowがどんなふうに脅かされてるのかっていうのを見つけて書けば、similarityとdifferenceが見つかるかなと思ったんですけど。それはちょっと質問に沿ってるかは分かんないんですけど。」

97 チューター： そうだね。これは文章の中でのhere and now。hereっていうのは、ここでは住居のことを言ってるのかな。

日本語母語話者である書き手が、イギリス人男性であるチューターに、書きたい内容を説明しようとしている場面。

Tutor: Is that related? Is that what you're trying to say?

Writer: Yes.

T: The fact that they like animation, and...

W: Yes, they just love Japanese things.

T: Oh, I see what you mean. Okay. I see. You're trying to say that there's a group Japanese followers, basically. Doesn't matter whether it's cartoons, anime...

W: Yes. Doesn't matter.

T: And visual kei bands come up and they say, "Okay, we'll follow that, too, because it's Japanese, it's really different." Okay. I get it. What should you say? What you've told me is good, but just try to reword it.

2. <ライティング・センター>における協働的活動

(6) 表現しやすい言語で、書きたい内容を話させる。(佐渡島・志村・太田、2009)

- 書き手が母語である日本語を使って英語文章を検討するセッションにおける書き手の発話文字数とチューターの発話文字数との比率(6セッションの平均)

書き手の発話	セッション全体の37.5%
チューターの発話	セッション全体の62.5%

- 書き手が非母語である英語を使って英語文章を検討するセッションにおける書き手の発話語数とチューターの発話語数との比率(6セッションの平均)

書き手発話	セッション全体の17.1%
チューターの発話	セッション全体の82.9%

2. <ライティング・センター>における協働的活動

(6) 表現しやすい言語で、書きたい内容を話させる。

■書き手が母語である日本語を使って英語文章を検討するセッションにおける、書き手とチューターの1ターンあたりの文字数(6セッションの平均)

書き手	28.6	文字
チューター	44.8	文字

■書き手が非母語である英語を使って英語文章を検討するセッションにおける書き手とチューターの1ターンあたりの語数(6セッションの平均)

書き手	8.8	語
チューター	54.1	語

2. <ライティング・センター>における協働的活動

『自立した書き手』を育てる

- (1) 添削をしない。代わりに書かない。
- (2) 書き手が独りになったときに文章の修正ができるように指導をする。
- (3) 書き手に会話の主導権を握らせる。
- (4) ヒントや修正の選択肢を示し書き手が最終判断をする。
- (5) 書き手が気付くように、質問をする。
- (6) 表現しやすい言語で、書きたい内容を話させる。



セッションの方針

書き手のアイデンティティ形成を支援



来訪者の声より

1. 「言いたいことがあるのにそれをうまく言語化できない時、チューターとの対話を通して、自分の考えが整理された。」
2. 「すぐに『答』を与えられるのではなく、『考え方』を与えられるので、自分の思考能力を高められた。」
3. 「第三者に読んでもらうことがいかに大切かが分かった。」
4. 「文法的な間違いだけでなく、より分かりやすくするための構成を考えてくれた。」
5. 「一緒に考えてくれたので、助かった。」

3. <オンデマンド授業> における協働的活動

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

<オンデマンド授業「学術的文章の作成」>

- ・2008春、08秋、09春、09秋、10春、10秋
- ・早稲田大学基盤教育(初年次教育)の一つ
- ・オープン教育センター科目、学部、1単位
- ・フル・オンデマンド形式
- ・8回、1回は約60分間
- ・教員が院生を指導し、院生が学部生を指導する
(10秋は、指導員52名、履修者1334名)

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

授業目的

「書くことによって思考を鍛える」「学問をする姿勢を身につける」

- 第1回 学術的な文章とは
- 第2回 文を整える
- 第3回 語句を明確に使う
- 第4回 全体を構成する
- 第5回 論点を整理する
- 第6回 参考文献を挙げる
- 第7回 引用をする1
- 第8回 引用をする2

- ・毎回、文章作成の課題が出る。毎回、個別にフィードバックする

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

個々の履修者と指導員との協働的活動

履修者(1週間以内に提出)

400字の文章を書く

自分の文章についてコメントを数行書く



指導員(1週間以内にフィードバック)

個々の箇所について吹き出しコメントを付す

総合的なコメントを書く

決められた配点で採点をする

The screenshot shows a student's submission titled "【第4回】 高校生のアルバイト" and the instructor's feedback. The student's text discusses whether high school students should work part-time. The instructor's comments (YM1-YM6) provide specific feedback on the student's arguments and structure. A rubric on the right lists evaluation points and scores for various aspects of the writing.

学生提出文:

【第4回】 高校生のアルバイト
—高校生が本当にやるべきこと—

本レポートでは高校生が在学中にアルバイトを行う必要があるかどうかについて論じていく。また、高校生が本当にやるべきことについても追究していく。

はっきり言って高校生がアルバイトをする必要はないであろう。しかし、アルバイトからでしか得られない社会経験があるという声も多い。たとえば、時間厳守の概念である。雇われれば高校生は社会における時間の厳しさを体験から学ぶことができる。他には言葉遣いや礼儀等である。しかし、これらは全部、真面目に高校生活を送れば身につくものである。高校では部活動等の課外活動もある。それに、体育祭や文化祭は生徒が中心となって企画をしていく。それら~~を~~一生涯命取り組むことにより、十分な社会経験を積むことができる。それに、アルバイトは高校を卒業してからもすることができる。高校生の間は高校生としてやるべきことを一生涯命やるだけで十分であろう。

以上のことから、高校生がアルバイトをする必要はないと言えるであろう。高校生は高校生活を十分に満喫すべきである。

指導員のコメント:

コメント [YM1]: 目的が明確に示されています。「について」が二度使われていますが、どちらも不要ではないでしょうか。

コメント [YM2]: 「はっきり」は話し言葉的な表現なので、避けたほうがいいでしょう。なぜ「必要はない」と言えるのかも、説明しなければ、わかりません。

コメント [YM3]: 「に」の繰り返しではないですか。

コメント [YM4]: 「本当にやるべきことについて」の「追究」に対する答えが「やるべきことを一生涯命やるだけで十分」というのでは、少しずれているように思います。結論の段階にある「高校生活を十分に満喫すべき」が、本論の結論なら、本論でも述べておく必要があるでしょう。(ー1)

コメント [YM5]: 「高校生活を十分満喫する」という言葉は、本論にないので、何をすることを指すのか、よくわかりません。結論は、本論で述べたことを繰り返す形で、目的(問い)に対する答えをまとめましょう。

採点/減点:

評価のポイントと評価点は、以下のとおりです。

- 3/3点 ①序論で文章の目的を明確にする
- 2/3点 ②序論で述べた、文章の目的を本論で達成させる
- 3/3点 ③序論と結論が呼応するようにする
- 1/1点 ④形勢を整えて書く(第1回参照)
- 1/1点 ⑤一文一義で書く(第2回参照)
- 1/1点 自分が特に注意を払った点またはコメントに対する感想もコメント欄に書く

「序論・本論・結論」という構成の仕方が、よく理解されています。第3回までの学習項目も、よく押さえられていると思います。「はっきり言って」という表現は、学術的文章には合わない表現なので、避けたほうがよいでしょう。

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

コメント欄に記入する指示

■ 第1回

「コース・ナビで提出する際に、コメント欄を使い簡単な自己紹介文を書いて下さい。これから8週間あまりお世話になる指導員にあなたのことを知ってもらいましょう。」

■ 第2回以降

「コメント欄に、自分が特に注意を払った点をかいて、指導員に伝えましょう。指導員からもらった、前の課題に対するコメントについての感想を書いてよい。」

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

履修者の背景を受け取って展望を示す

初めまして。第一文学部1年の〇〇です。入学したのは2006年なのですが、休学をしていたので一年生からの再スタートです。実は、まだ一度もレポートを書いたことがなく、どのように書いたらよいのかもわかっておりません。8回の授業で的確な学術的文章を書けるよう頑張っていきますので、どうぞよろしくお願いします。



第一回目の課題、おつかれさまでした。いかがでしたか。
今回のポイント、よく抑えられていました。レポートをまだ書いたことがないということですが、この授業だけでも8本文章を書いてもらうことになるので、文章力がどんどんついていくと思います。これからもこの調子で頑張ってください。こちらこそ一学期間どうぞよろしくお願いいたします。

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

履修者が、授業ポイントを綿密に書き出して自分の文章に照らし合わせている。

(12点中10点)

- ・目的にあった引用部分を選ぶ(日本で生活する留学生の厳しい現状を示している部分)
- ・著者名、年を示す(海外留子、2007)
- ・引用目的を示す、主張の裏付け(留学生のための支援が必要である。→厳しい現状をしめし、支援の必要性を認識させる)
- ・引用部分(右に3,4字引っ込める、p.を書く←ここでは何ページなのか分からないためp.だけ書いた)
- ・引用部分のポイントを一文で整理する。
- ・引用部分と関連させながら、自分の主張を述べる。



ブロック引用の基本が理解できていますね。いくつか気になる点はコメントを書きましたので、参考にしてください。また、自分の主張とうまく関連させながら論じることができていますね。

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

低迷している履修生が困難を訴える。プラス思考に変える。

(12点中5点)

結論を最初を書くか、最期に書くかの判断がとても難しかったです。前は助詞の「の」の変換に全く気づいていませんでした。「の」を使うことに慣れてなく違和感がなかったのです。毎回、縛りが増えて難易度が上がっていることを実感します。



難易度があがっていると実感できるということは、それだけ、たくさんの文章技術に気を配っている証拠です。書き手として成長していますよ。頑張ってください。

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

低迷している履修生が愚痴をこぼす

(12点中7点)

指定された字数が短く、書こうとしたことが半分もかけなかった。



コンテンツの最初に「中心と範囲を決める」という内容がありました。覚えていますか？このレポートの中心＝アルバイトは高校生が将来を考えるよいきっかけになるか？ですよね。中心はきちんと決められていますが、書く範囲が広すぎたので、字数制限にひっかかったのだと思います。「範囲」を狭めましょう。例えば、2つの意見のうち1つ(自分の意見に近いほう)をとりあげて論じれば、よいのです。

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

学習態度で低迷している履修生をひと押しする

(第7回、12点中7点)

近頃うまくスケジュールのやりくりができず、四苦八苦しております。ご迷惑をおかけして申し訳ありません。



こちらは大丈夫ですが、できればいい評価を付けたいと思っているので、もうひとふんばり頑張ってくださいね。(第8回も必ず提出してくださいね。)

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

履修者が文章技能について質問し、授業内容を超えて書き方のコツを示している

非常に字数が多くなってしまいました。また題名のつけかたなのですが、正直資料を参考にしたのですが正しいのかどうかよくわかりません。題名のつけかたのコツを教えてくださいとありがたいです。



- ①文章を書き終わった後、最後に題名をつける。
②文章中のことばをもちいて題名をつける。

3. <オンデマンド授業>における協働的活動

履修者の声(授業評価アンケートより)

- (1)「指導員の先生からのコメントを読むのが楽しみでした。やる気を起こす言い方をしてくださるので最後まで頑張れました。」
- (2)「自分の文章を客観的に、私と直接面識のない先生からの、正直なご指摘はとても意味のあるものだった。」
- (3)「押し付けの意見ではないのがよかった。」
- (4)「『このように書くこともできる』という内容のコメントも付して下さったので、書き方の幅が広がり、大変勉強になりました。」
- (5)「次に繋がるようなコメントであったため、とても役立ちました。」
- (6)「拙い文章でもそれを尊重してくれました。もっと批判的でもよかったです。」
- (7)「内容についても書き方についても指導してくれたので、とても勉強になりました。」

3. <オンデマンド授業>における 協働的活動

<オンデマンド授業>にかかわる評価調査

- ア) 各履修者の、文章に対する意識の変容(「好き・嫌い」「得意・苦手」意識)と文章作成能力の伸び方の相関(量的)
- イ) 履修者が付すコメントの内容(質的)
- ウ) 指導員が付すコメントの種類と文章作成能力の伸び方の相関(量的・質的)
- エ) ポートフォリオによる履修者の自己評価(質的)
- オ) 本授業履修の有無と「学士力」との相関(量的)

4. チューターや指導員の成長

4. チューターや指導員の成長

文章作成の「技能」と「経験」

文章について学んでいくあの授業[大学院生向けアカデミック・ライティング授業]は、「観点」について学んでたんだなっていうふうにするくわたくしも気づいて・・・でも、ただ聴いたら技能が、観点が得られるかっていうとそうじゃなくて、それを実際に自分の文章の中でやってみたりとかっていうのが大事なのかなって。

4. チューターや指導員の成長

<指導員>(学期末の個別面談より)
文章作成の過程や技能に対する見方が変わる

(1期目に指導員養成のための授業を受け、その後、3期連続でオンデマンドの指導員を勤めた指導員)

「毎週毎週オンデマンド授業を聴いて、そのたびに同じ内容でもとらえ方が変わってきた。前には理解できてなかったと思うところも拾い上げて理解することができてきた。そして、その理解を基に人の文章をたくさん見て、コメントの付け方が変わってきた。」

4. チューターや指導員の成長

<チューター> (ベテラン・チューターへのインタビューより)
チューター同士の議論で成長した

文字化のもの[原稿]に対してどういうふうに判断するか。・・・
[チューター3人で発表の準備をしていて]実際にある部分に
対して、わたしはここはいい流れだと思ってコメントしたら、
〇〇さんは全然違う。「ここはちょっと、これはまずいよ
ね。」っていうふうに言っていて、それでわたしも気づかされ
たというか。そうか、確かに〇〇さんの言う観点から見れば、
これはちょっとチューターが引っ張りすぎてるかなとかってい
うのが、ほんとに勉強になったんですよ、その時間が。

4. チューターや指導員の成長

<チューター> (ベテラン・チューターへのインタビューより)

文章の修正箇所、修正方法は、何がよいのか分からない

「気づきを促すって何なのかってのも、まだ分かってないっていうか・・・な
んか気づきを促すっていうと、あたしが答えを知ってて、何かそこに導くよ
うな感じがしてしまって、あんまり、何ていうか、好きじゃないというか・・・
何がほんとにいいかはやっぱり分からないので、話の中で見つけていく
か、今はできないからかもしれないですけど。・・・そういうセッションの後
だと、あ、よかったなって思います。・・・で、やっぱり、そういうことができ
るセッションだと、学生さんもすごい意識が高かったりとか、文章について
こうしたいとか、こうしたほうがいいんじゃないかっていうのが、本人から
出てくることが多いからかもしれないんですけど、けっこう・・・そうすると、
わたしも気づかなかったことがたくさん出てくるので、『あ、そっこのほうが
いいね。』とか言って。」

今後の課題

書き手としてのアイデンティティの形成

- ・ 「自立した書き手」を育てる理念を貫く
- ・ 書き手のownershipを守る指導方針



- ・ 継続した研修、チューター・指導員のピア批判
- ・ 顔が見えない関係の中でのコミュニケーション
- ・ 形式と内容の融合
- ・ 領域を横断しての、チューター育成・指導員育成
- ・ 多言語化が進む学習者への対応

佐渡島紗織 (2005) 「早稲田大学アジア太平洋研究科における『アカデミック・ライティング』授業—書くことの総仕上げ」『早稲田大学国語教育研究』25、55-65

佐渡島紗織 (2006) 「早稲田大学国際教養学部が発足したライティング・センターの運営と指導—国語教育の他分野への貢献」『早稲田大学国語教育研究』26、82—94

佐渡島紗織・吉野亜矢子 (2008) 『これから研究を書くひとのためのガイドブック—ライティングへの挑戦15週』ひつじ書房

佐渡島紗織・太田祐子・志村美加 (2009) 「日本語母語話者が日本語で英語文章を検討するセッションの有効性—書き手を育てるライティング・センターでの対話」早稲田大学国際教養学部紀要『Global Forum』5、57-71

佐渡島紗織 (2009) 「自立した書き手を育てる—対話による書き直し」『国語科研究』66、11-18

佐渡島紗織 (2010) 「早稲田大学における学術的文章作成授業—2年目における成果と課題」『初年次教育学会誌』2、72-79

「早稲田大学アカデミック・ライティング・プログラム」
<http://www.cie-waseda.jp/awp/index.html>